

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアアクション演習（特別授業）

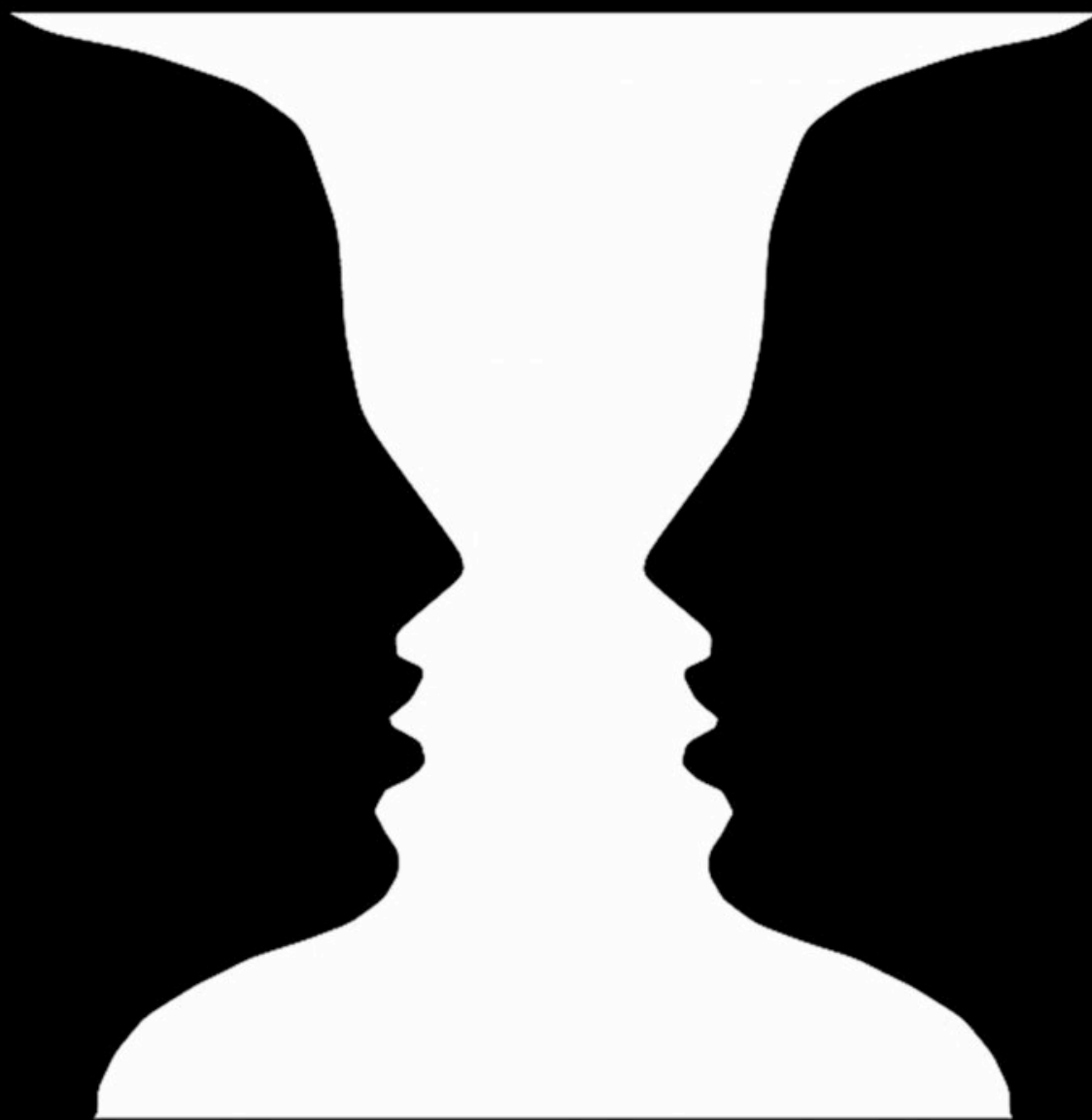
〈授業のねらい〉と〈詩人・金子みすゞ〉さん

（第1回：2015-11-06）

担当： 石井 拓洋

ishii05042@venus.joshiabi.jp

2015



「ルビンの壺」(多義図形)

<http://d.ibtimes.co.uk/en/full/1426245/rubins-vase.jpg?w=736>

Text に沈むようにして読むこと、それは徹底的に教わることである。
しかし Text は考えつつ問う者にしか教えない。

それは或る意味で自問自答になる。それを少し広げる手がかりが
古くからの註解であり、ともに読む人の意見である。

しかし、また、text に沈まなくてはならない。
深く沈んで底流を知る者のみが、浮かび上がったときに違う風景を見る。
それだけ進んだのであろう。

また〔※ さらに再び〕text に沈むようにして読まなくてはならない。
こうしてまた〔※ Text から〕浮かびあがる。

このようにして形成されてくる風景に text の射程が見えてくる。

【授業について】

- 社会や文化を考える上で重要な論点の幾つかを確認する
- “Text” に深く「沈み」、そして「浮かぶ」授業
- 金曜日・週1回・全7回
- 「講義」と「実習」（「インタラクティブ」作品制作とは別）

【授業目的】

- 次年度の卒業制作作品の〈充実〉
- とくに制作理念面での〈充実〉

〈充実〉のために、、、

- 〈世界認識〉にかかわる代表的論点の確認
- 近代的イデオロギーとしての「芸術」を相対化する視点
- 芸術の本質としての「ミメーシス」(模倣)説の確認

本日のメニュー

【本日のメニュー】

- この「授業のねらい」について

- 童謡詩人 金子みすゞさんについて

映像『明るいほうへ明るいほうへ-童謡詩人 金子みすゞ』
(TBS 創立50周年記念番組、2001年8月27日 放送)

【この授業のねらい】

シラバスにかえて

【授業のねらい 01/16】

環境問題、人口問題、民族対立、社会規範の喪失等をあげるまでもなく、現代のわれわれが暮らす環境には、さまざまな問題が露呈している。

これらの問題の多くは、皆が被害者であると同時に、また加害者ともなる構造をもつことに着目すべきである。

つまり、誰も「高みの見物」を決め込むことは出来ない。

【授業のねらい 02/16】

このような現代の問題を考えるにあたり、
われわれの従来的な世界認識や、それに基づく
思想風潮 (イデオロギー) は、根底からの再考が求められている。
つまり、それは啓蒙思想に導かれた、十八世紀の産業革命、
市民革命以来の、西欧の〈近代主義〉的世界認識である。

【授業のねらい 03/16】

かつて〈個人〉を生み出し、科学を飛躍的に発展させ、
〈ユートピア〉を約束したはずの〈近代〉は、しかし、
いみじくもアドルノらが指摘したように、二度の大戦、
ナチスの蛮行、そして核兵器をもたらし、
すでに百年前に、むしろ〈野蛮〉を招くことを露呈した。

【授業のねらい 04/16】

また、〈自然〉は、いずれ科学において〈機械論〉的に制御可能となるべきものであった。しかし、巨大地震や異常気象に顕著であるように、それは、われわれの認識よりも、はるかに複雑で壮大なスケールを持つものであったと言わざるをえない状況である。

【授業のねらい 05/16】

さらに、かつては「野蛮なる未開人」と目され、いずれ、啓蒙されるべき存在と思われていた非西欧圏の人々の風習に、高等数学に基づく文化の構造を〈近代〉が看取した時、その傲慢なる〈西洋中心主義〉的、かつ、そのあまりに楽観的な〈進歩主義〉的な近代の神話はついに揺らぎはじめた。

【授業のねらい 06/16】

〈現代〉のわれわれは、〈近代〉がもたらした科学的発展などの恩恵を継承しつつも、その一方で、今現在の無視しえない問題を前にして、その問題の淵源としての〈近代知〉に基づく世界認識の批判的検討が求められている。そして、批判的検討を通じた、いわば〈現代知〉に基づいた、新たなる世界認識の構築が求められているのである。

【授業のねらい 07/16】

現代のほとんどの学問領域（人文科学、社会科学、自然科学）の問題意識とは、およそ、このような背景に基づいて表れた諸相といえる。そして今、大学という特殊な場に、あえて身を置きながら芸術に携わるわれわれとしては、このような学問領域の文脈のなかで、芸術を考えていくこともまた必要ではないだろうか。

【授業のねらい 08/16】

さて、様々な問題を含む〈現代〉において、
〈芸術〉に携わるわれわれは、〈芸術〉によって、
いったい何ができるのだろうか？
そもそも、作品を構想し、作品を作るということ、
そこに、どのような意義が見出さうのだろうか？

【授業のねらい 09/16】

このような問題を考えるにあたっても、
われわれは〈近代〉を視野にいれねばならない。
なぜならば、われわれの〈芸術〉に対する認識もまた
おおいに〈近代〉のイデオロギーを反映したものと
考えられるからである。

【授業のねらい 10/16】

現代のわれわれの多くが自明視する〈芸術〉における価値

とは、およそ「芸術家個人の個性と内面性の表現」（松宮秀治

『芸術崇拜の思想』 p.14）とも言うべきものではないだろうか。

そして、古代から現代まで、いつの時代のどの地域でも

このような創造性や独創性にこそ〈芸術〉がつねに価値

づけられてきたと自明視する向きも多いかもしれない。

【授業のねらい 11/16】

松宮氏をはじめ、現代の多くの識者は、
先のような〈芸術〉における自明なる価値の認識とは、
約二百年前頃の〈西欧近代〉という限定された時期と
場所によって形づくられたにすぎないことを指摘する。
つまり、われわれの多くの〈芸術〉の認識は、いまだ
〈近代思想〉に影響されたままとも言えるのである。

【授業のねらい 12/16】

それでは、近代以前の〈芸術〉なる存在は、
いったいどのように価値付けられるものであったのか？
美学研究の青山昌文氏をはじめ、多くの識者は
ここで、アリストテレスの〈ミメーシス〉に基づく
芸術の価値を再考する。

【授業のねらい 13/16】

〈ミメーシス〉 mimesis とはギリシャ語が語源であり、日本語では「模倣」や「再現」と訳されるものである。アリストテレスによれば、われわれの現前の世界、それ自体にすでに「本質的な価値」が内在し、それを、詩や絵画や音楽といった手段を使用して〈ミメーシス〉(模倣) することにおいて芸術が価値付けられるとされる。

【授業のねらい 14/16】

この〈ミメーシス〉による芸術の理念は、また、
二十世紀の思想家アドルノによっても価値付けられた
ことで知られる（細見和之『アドルノ：非同一性の哲学』
1997年 など）。

【授業のねらい 15/16】

この授業では、様々な問題を抱える現代において、
〈芸術〉が何をしうるのか、その営みが、
どのように意義をもち・価値づけられうるのかを、
〈近代批判〉や〈ミメーシス〉を軸として、
考えてみたい。すくなくとも、それを考えるためには
最低限必要となるであろう基礎的視点を提供したい。

【授業のねらい 16/16】

授業は「講義」と「実習」で構成される。「講義」では、批判的に検討すべき「西洋近代」についての認識を主に深めること、「実習」では、課題提出という形にあまりこだわることなく、おもに、「ミメシス」の認識や感覚を深めるために、「体験すること」をとくに企図している（以上）。

【講義内容】

- なぜインタラクティブ性がもとめられるのか？
- 世界の見方 : 「近代」と「現代」
- 作品の見方 : 「批評理論」の基礎
- 「ミメーシス」mimesis (模倣) の理念の確認

【実習内容】 (実験的だが、、、)

- ・ 「詩」と「音」と「映像」の共生の実験
- ・ 作品内部でのメディア間のインタラクティブ

(※ 一つのイメージとして)

【Youtube】宮沢賢治 21世紀映像童話集 やまなし

<http://www.youtube.com/watch?v=JcaGlc7hYIc>

童謡詩人 金子みすゞ さんについて

童謡詩人 金子みすゞ さん について



画像: wikipedia「金子みすゞ」より

- ・ 金子みすゞ (1903 – 1930)
- ・ 童謡詩人
- ・ 詩人 西条八十 に才能を見出される
- ・ 代表作
 - 「おさかな」
 - 「私と小鳥と鈴と」
 - 「こだまでしょうか」
- ・ 享年26歳
- ・ 本名 金子テル さん

私と小鳥と鈴と

金子みすゞ

私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすつても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄はしらないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがつて、みんないい。



木

お花が散って
実が熟れて

その実が落ちて
葉が落ちて

それから芽がでて
花が咲く。

そうして何べん
まわったら
この木は御用が
すむかしら。

金子みすゞ



【実習内容】 (実験的だが、、、)

「詩」と「音」と「映像」の共生の実験

- ・ 背景画像とテキストが適宜現れる映像を作成
- ・ 詩の世界を模倣する自然音や背景音楽を付す
- ・ テキストを〈模倣〉して作成した旋律を付す

音の3要素「音高、音の強さ、音色」。

リズム、構成感、内容の反映

例

お花が散って



実が熟れて、



旋律線
イメージ

その実が落ちて



葉が落ちて、



金子みすゞ「木」冒頭2連より

【実習内容のねらい】 (実験的だが、、、)

- ・ 詩のテキストを、音の3要素の側面から〈模倣〉
- ・ 詩のテキストの「文脈」を活かした〈模倣〉
- ・ “Text” と「作者」に 深く「沈む」。感じ入る。
- ・ 作品内部に秘めた、概念としてのインタラクティブ

童謡詩人 金子みすゞ さんについて

【なぜここで、いきなり 「詩」 なのか？】

- 音楽は本来、詩 (ことば) と 共にあったと考えるから
 - 近代的 「自律音楽」、「自律芸術」 批判の立場から
- 詩こそ 「ミメーシス」 が反映したものだから
 - (典拠) アリストテレス 『詩学』 (前4世紀)
- 「ムーシケー」としての統合、調和的な音楽の再考
 - 近代的 「自律音楽」、「自律芸術音楽」 批判の立場から

【なぜ 金子みすゞ なのか？】

- 〈人間と自然との共生〉をうたうものとして
 - 「私と小鳥と鈴と」など。 脱二元論的な〈自然の精神性〉へのまなざし
- 近代日本の女性表現者としての生きざま
 - 男性中心主義的 (近代的) な中での困難
- 韻律やことばの量 が音楽を想起しやすい
 - 詩と音楽との融合を想起しやすい

童謡詩人 金子みすゞ さんについて

【映像資料】

『明るいほうへ明るいほうへ-童謡詩人 金子みすゞ』
(TBS 創立50周年記念番組、2001年8月27日 放送。監修：矢崎節夫。)

仙崎

下関



■ 金子みすゞ (金子テル) : 1903年～1930年

矢崎節夫『童謡詩人金子みすゞの生涯』東京:JULA出版、1993年より。

【みすゞの家族】

- 実父・金子庄之助 : 仙崎市 書店「金子文英堂」店主) みすゞ3歳の時逝去。
実母・ミチ : 後にミチの妹の亭主と再婚 (中田喜子)。
みすゞの兄 : 堅助 。1901年生まれ (野村宏伸)。
みすゞの弟 : 正祐 (雅輔) 。2歳の時に母ミチの妹夫婦へ養子にだされる。
正祐は みすゞが 実の姉であることを知らない (三宅健) 。
後に 劇団若草主宰。桃井かおり、坂上忍、吉岡秀隆らをそだてる。のちの上山雅輔。
- 養父 (下関) : みすゞと雅輔の養父 = 上山松蔵 (下関市 書店「上山文英堂」店主 (渡哲也))。
養母 (逝去) : 雅輔の養母 (実母の妹) = 上山フジ。しかし 雅輔13歳の時に逝去。
後妻、実母・ミチ : ミチ自身の実妹フジの逝去のあと、フジの亭主と再婚 (中田喜子) 。つまり、養子に出した正祐の継母となる。

【年譜】

- 1903年: みすゞ 山口県仙崎に生まれる
1905年: 弟 上山雅輔 山口県仙崎に生まれる
1906年: みすゞ3歳、雅輔1歳、仙崎の実父の庄之助逝去
1907年: 雅輔2歳、実母ミチの妹の嫁ぎ先である下関の書店「上山文英堂」へ
養子にだされる (ここで養子に出されたことを雅輔自身は知らない)
- 1916年: みすゞ13歳、山口県立大津高等女学校入学 (仙崎) 。
1918年: 雅輔13歳の時、下関の養母フジ (実母 ミチの妹) 逝去
1919年: 雅輔14歳、みすゞ16歳の時、養父・上山松蔵と実母ミチが再婚。
1920年: みすゞ17歳、山口県立大津高等女学校卒業 (仙崎) 。ここまで兄堅助が父親がわり (TVドラマはここから開始) 。
- 1922年: みすゞ19歳、母ミチが再婚で嫁いだ下関へ引っ越し。兄堅助が結婚したため。
名目上は義理の弟だが、実際は実の弟である雅輔と暮らす。
(雅輔はみすゞを義理の姉だと思っていた) 。
- 1926年: みすゞ結婚 (23歳) 長女ふさえ誕生。
1930年: 逝去 (26歳)

■ 複雑すぎる 金子みすゞの家族関係 (メモ) ~ この複雑さが気になる人へ

- ・ 金子みすゞ (= 松たかこ) は山口県仙崎に生まれる (実母は 金子ミチ= 中田喜子)。
- ・ 仙崎の実家は 書店「金子文英堂」。しかし、みすゞが3歳の頃、実父が逝去。母ミチはしばらく再婚せず。
- ・ 2歳下に 実の弟 金子正祐 (= 三宅健) がいた。2歳上に兄 堅助 (= 野村宏伸) がいた。
- ・ 弟の正祐は2歳の物心がつかない時、下関の 上山家 へ養子にだされる。ここで上山正祐 となる。
- ・ 上山家 (下関) と金子家 (仙崎) の関係 = みすゞと正祐の実母・金子ミチの妹フジの嫁ぎ先が上山家。
- ・ 上山松蔵 (= 渡哲也) は 下関の大型書店「上山文英堂」を営む。
- ・ 上山家は書店の跡取りがほしいが子ができず、フジの姉の子・金子正祐を養子にした。
- ・ 正祐は、上山松蔵や フジを実の親と思っている。ミチが実母、みすゞが実姉であることを知らない。
- ・ 正祐は、ミチを伯母 (母の姉)、みすゞを 仙崎のイトコと思っている。
- ・ 正祐 13歳とき、彼が実の母と思っていた 上山フジが死ぬ。
- ・ 上山松蔵 (= 渡哲也) は、後妻に 上山フジの姉、ながらく一人で過ごしていた 金子ミチをめとる。上山ミチとなる。
- ・ なので、正祐からみれば、本当は実母でありそれまで伯母と思っていたミチが、あらたに継母となった。
- ・ また、正祐からみれば、本当は実姉でありそれまでイトコと思っていたみすゞが、あらたに義理の姉となった。

以上